

『風頭公園を下る』

◎登場人物

男

女

風頭公園から坂を下っている。

階段で止まる、ふたり。

男「見て。迷ってるよ。グーグルマップの通りに来たら、これだもん。これ、本当に近道なんだろうな」

女「…なんかね、おばあちゃんが言った」

男「おばあちゃん？」

女「空襲警報が鳴ったら、カーテンを閉めて電気を消すんだって。それで防空壕に入って、耳を澄ますの。そしたら、雨が降るようなバラバラバラって音がして、外の色んな所が明るくなる。これは駄目だと思って、ひいばあちゃんと一緒に子供を連れて、山のほうに逃げたんだって。山の田んぼまで来たら、家の辺りが真っ赤に燃えてて、必死で田んぼの脇にある小屋に逃げ込んで。助かったと思ってたら、どこかで飼ってた牛が逃げ出して、コツコツ扉を叩いて来たらしい。…迷ってるの？」

男「…迷ってるみたい」

女「そう？」

男「だって、墓場を普通通るか」

女「墓場を通ったほうが、早いって判断したんじゃないの。グーグルマップが」

男「そうだな。…バラバラバラって、なんの音」

女「ああ、おばあちゃんが聞いた雨の降るような音？」

男「雨ではないの」

女「雨じゃない。焼夷弾。焼夷弾、知ってる？」

男「熱いやつ」

女「それ、焼夷弾の焼けるって漢字から想像しただけでしょ」

男「そう」

女「爆撃機から地上に落下させて、家や人間や何もかもを焼き尽くす爆弾」

男「へえ」

女「あなたのおじいちゃんや、おばあちゃんから話聞いたことないの？」

男「知らない」

女「そっかあ。知らないよね、知らないよなあ」

男「うん」

女「おばあちゃん、嫁いだ大阪で空襲にあって家が燃えて、疎開先の実家がある宇和島でも、空襲で家が燃えたの。しかも、宇和島では2回も」

男「ひどいな」

女「その頃から、貧乏になる布石があったのかもしれない。…牛がね」

男「牛？」

女「さっき話したでしょ。空襲で逃げた時に、田んぼの横で牛が小屋の扉を叩いたって」

男「ああ、牛ね」

女「焼夷弾を落とされるかどうかより、牛の角に刺されて死ぬかもしれない恐怖のほうが強かったって」

男「墓場で話すの怖いな」

女「…稻佐山の頂上が見える」

男「ああ、本当だ。竹の葉で見えにくいな」

女「ねえ。75年草木の生じることなしって、どういうことなんだと思う？」

男「そういうことなんじゃない」

女「…伊方から近いのよ。宇和島が」

男「伊方？」

女「愛媛にもね、原発がある。宇和島から、そんなに遠く離れてないの」

男「…何キロ圏内？」

女「40キロ少し」

男「そうか。遠いことはないな」

女「遠くはないの。近いの」

男「うん」

女「それより、何キロ圏内って言葉…使い慣れた感じがして嫌」

男「え、使うでしょ」

女「使うよ。使うけど、本当は地震の以前から知って使っても当然の言葉なのに、皆、使い慣れてはなかったじゃない。それなのに、当然の如く、今は使っちゃってさあ」

男「駄目なの？使うだろ」

女「使うよ私も。でも、伊方が近くにあるのに、何キロ圏内だなんて、小さい頃聞いたこともなかったし。誰も使い慣れてなかったよ。地震が起きるまでは知らなかったんだよ」

男「大阪は関係ないからな」

女「関係ない？関係あるよ。何事も関係ないことなんてないよ」

男「それはそう」

女「だから嫌なの。理解してる気分になるのは絶対嫌なの」

男「311以降、も嫌いなんだろ」

女「嫌い。311以降や以前って言葉も嫌い。意味は分かるけど」

男「理解はできても納得はできないってことか」

女「そう」

男「ふうん」

女「つまらないこと、話してる？」

男「いいや。つまらなくないよ」

女「…うん。あ、電車の音が聞こえた」

男「お。じゃあ、やっぱり、グーグルマップは迷ってはなかったんだな」

女「このまま下ったら、なんていう駅の名前だっけ」

男「正覚寺下」

女「良かった。遭難したかと思った」

男「階段下ったら、駅までもうすぐ」

女「昨日も下って、今日も下るの妙な気分」

男「分からないけど」

女「原爆資料館も」

男「…下ったね」

階段を下り始める、ふたり。